

訓点資料に使用されたヲコト点・仮名点の計量研究 —西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点を用いて— 柳原恵津子, 高田智和

本発表では、九世紀の加點の実態を詳細にとどめた西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点（白点）巻1に記されたヲコト点・仮名点の使用の実態を、計量的に分析することを試みる。調査・分析には現在作成中のコーパス用本文のタグの情報を用いる。調査範囲全漢字 6427 字のうち、ヲコト点のみが施点されている字は 2471 字、仮名点のみは 392 字、ヲコト点仮名点併記されている字は 376 字、無訓の字は半数の 3190 字である。施点の状況から以下の諸点を指摘する。いずれも、より正確な訳文理解への一助となる知見であろう。

- ①ヲコト点、仮名点ともに記されない字は、文脈上助詞助動詞、語尾などの読み添えのない字、二字以上の字音語・熟語の語末以外の字、定型的表現などで施点が省略された部分に限られ、名詞の格や活用語の語末、節や文の末尾の接続などをすべて書き記す方針であることが推測できる。
- ②「み」「ひ」の点が使用された例に、動詞連用形の語尾を示した例が複数認められ、複合動詞の前項や連用形中止の例について語形を記すことを目的のひとつとして用意された点である可能性を想定できる。ただし、名詞など他の品詞の語に使用される例、施点の位置がずれた例などが一定数見られ、「の」「を」など用例数の多い点に比べて不安定な面がある。
- ③右中、左中、右下、下中央、左中央など、同一箇所施点された星点に2種の読みがあてがわれている場合も、前後への読み添えや文脈から読みを特定し得ない例はほとんどない。「を」と「こと」のみ、訳文作成者の判断が介入していると思われる。
- ④「と」を表す星点が二カ所あるが、使用例を精査すると、引用の場合は右下、並立の場合は左中と、用法により明確に使い分けがなされている。